

サビエル生誕五百年



巡礼の道

352

藤屋侃士
(下松市幸ヶ丘)

励まし、励まされ

～再び岩手県大槌町へ⑨～

東日本大震災が発生してはや二年が過ぎた。当初は大勢のボランティアが被災地を訪れたが、今は少ない。

現地スタッフによる復興が遅れ、今も仮設住宅に住む人たちが、今も仮設住宅に住む人たちが、今も仮設住宅に住む人たちが



瓦そばを焼く高校生ボランティア

れられた存在ではないかという気持ちを抱かせているという。

今このボランティアの仕事は被災者の孤立化を防ぎ、一緒に復興に向かって頑張ろうという「励まし」が主要な役目である。だから現地の様子を知ったりピターのボランティアが現在は多い。

今回、一番離れた金澤仮設団地を訪れた。二百平方キの大槌町に四十八の仮設団地があるが、金澤仮設団地は町の中心部だったところから車で約三十分、大槌川沿いの山奥にある。こんな不便な所にいては、それだけで孤立感を持つのは当然だろう。

大槌町の人口は現在



私の手づくりケーキ

昼食にふぐ雑炊を振る舞った。今回は山口県名物の瓦そばを主婦ボランティアが中心になって用意してもらった。

私ができることはといえば、ケーキを焼くこと。妻が病気を患ってからは焼くのは私の仕事になった。月に二、三回、三年も焼いていれば誰でも上手になる。昨冬はそのケーキをクリスマスプレゼントに、今春は誕生日プレゼントとして配る。ハンドミキサーをまわしながら被災地のことを考えながら作る。ケーキよりもこのことの方が大切なのかもしれない。

歌う若者たちの後ろの壁に、別のボランティアが書き残した「大槌、ありがとう」という張り紙が目に入る。そうだ、励まされたのは被災した人たちだけではない。私たちボランティアも被災者の人たちの生きる姿に励まされる。「共に生きる」とはそういうことなのだ。

約一万三千人。このうち五千人以上が仮設住宅に住んでいる。しかし、仮設住宅を出る見通しは全くない人がほとんどだ。公営復興住宅の建設も遅れている。そんな中で仮設での孤独死の話聞く。我々が仮設住宅で会う人は高齢者がほとんどだ。自分の将来に希望が持てないこの人たちのことが自分のことのように思え、胸がしめつけられる。

ボランティアとして何をすべきなのだろうか。今回も出発前に参加者が集まり話し合う。昨年冬は集会所で



歌のボランティアの人たち